様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２６３１

研究課題名（和文）ESDを視野に入れた学校体育におけるプログラム開発

研究課題名（英文）Program Development on School Physical Education with an ESD Perspective

研究代表者
三原　幹生（MIHARA, Mikio）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３０３６８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：近代スポーツを中心とした現状の教科体育では、身体は、技術を高めるため、そしてそれはスポーツの発展のために用いられてきた。結果的に近代スポーツは、様々な社会的かつ人的弊害も生み出してきた。しかしながらESD（Education for Sustainable Development）という視点から教科体育を再考するならば、自分の身体は、限りある人生を主体的に生きる上で有限でかつ重要な資源であると捉えることができる。それ故これからの教科体育においては、重要な資源としての身体を自ら持続的に発展させる能力を育むため、「運動の行い方や高め方」を生涯にわたって発揮できる段階的なプログラム開発が求められる。

研究成果の概要（英文）：In school physical education, modern sports have been a main concern, our body is used to improve skills and to develop sports. Modern sports have yielded various kinds of social and human abuses as a result. However, if it is reconsidered from the point of ESD (Education for Sustainable Development), our body can be regarded as limited and important resources when we live a mortal life in a responsible way. Thus, in order to grow our abilities of developing our body sustainably, in the future school physical education, we need to develop an incremental program to use ” how to do movement and to improve movement ” actively throughout our lives.

研究分野：体育哲学

キーワード：ESD

１．研究開始当初の背景

平成 20 年７月１日に「教育振興基本計画」が閣議決定された。そこでは、ユネスコの「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育（ESD)」が提唱されており、「地球的規模での持続可能な社会の構築は、我が国の教育の在り方にとっても重要な理念の一つである」という認識が示された。そして、その５年後の「第２期教育振興基本計画」（平成 25 年６月 14 日閣議決定）においても ESD を推進することが提言された。こうした視点からの教育への関与としては、Sustainable Development という考え方が導入される契機となった問題、すなわち、環境、貧困、人権、開発等々の問題と直接関連する教科がクローズアップされがちである。しかしながら、日本ユネスコ国内委員会における ESD の説明には、「ESD とは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そして、それによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動」であるとされている。すなわち「身近なところから取り組む」こと、そして、そこから“think globally, act locally”という視点を育むことが求められているのである。この意味において、スポーツ文化を中心にした授業が展開される学校体育においても、ESD への取り組みから免除されるものではなく、授業の中核的素材であるスポーツ文化そのものも、地球規模の問題と切り離して考えることはできないのである。

２．研究の目的

スポーツ文化そのものが、近代の特徴でもある「成長的発展」の産物であると捉えるとき、それを主たる教材としてきた学校体育のプログラムも、ESD の視点から再考されるべきであると考える。従って本研究の目的は、「持続発展教育(ESD)」の視点をベースとし、将来を展望した学校体育のプログラム開発を行うことにある。

３．研究の方法

まずは、近代スポーツの特徴およびそれが先鋭化された現代スポーツの問題について検討を加える。そのうえで、新たな学校体育プログラムに導入するための ESD が求める学びの方法論について調査・研究を行う。さらに、2 年間の研究成果をふまえて、学校体育期を終えた大学生を対象にして、主体的なスポーツ観や未来を見通したスポーツ観の構築を可能にする学校体育プログラムの開発を試みる。

４．研究成果

「近代」が構築した社会システムは、「限りない成長」を目指すものであった。しかしながら「資源の有限性」という視点は、近代社会システムに対して大きな転換を求めている。それが“SD(Sustainable Development）”という考え方であり、またそれを実現していくためにユネスコも ESD（Education for Sustainable Development）として「新たな学び」の方向性を求めている。一方、スポーツもまさに近代社会システムが創出した文化であり、それ故、スポーツを主たる教材として扱う教科体育においてもまた「新たな学び」に資する必要があると言えよう。上記の問題意識から本研究は、スポーツ文化の未来像構築に向けて ESD の視点からのアプローチを試み、以下の３点について、明らかにした。

（１）スポーツ生活者の身体・スポーツ生活・スポーツの持続可能性について

スポーツ生活における成長志向の弊害を批判的に考察し、それに代わる新たな思考様式について SD 論を参照しながら文献考証により検討した。

SD 論は、環境・社会・経済の持続可能性と、それらの質的水準の向上を目指すことを目標とする。それは、「資源の有限性」をその端緒とするものであり、このことはまた必然的に、スポーツを実践する我々の「身体の有限性」を認識することから思考を開始すべきことが必要条件となる。また従来のスポーツ実践は、我々の身体をスポーツそのものに合わせよう（媒体）とし、「上手くなること」を身体に強要するが故に、様々な社会的かつ人的弊害を生じさせていると言えよう。それ故スポーツ実践は、自らの能力の基礎的で広範な可能性の顕現化を目指すことに価値を置くことによって、有限な身体を主体的にかつ持続的に維持することが、これからのスポーツ生活を充実させるためにも必要であることを明らかにした。

（２）スポーツ文化を持続可能にするための要件について

持続可能なスポーツ文化の要件を探るために、学校体育期のプログラムの再検討をするとともに、生涯にわたって人と人がスポーツでつながる事例としてマスターズ大会の検討を、さらには、オリンピックムーブメンツ・アジェンダ 21 が示している内容を検討した。

「人と人とのつながり」をスポーツにおいて形成し、それを生涯にわたって継続するための基礎的な方法として、小・中・高校の教科体育におけるプログラムの中で、「運動の行い方高め方」についての能力を育んでいくことが必要である。また学校体育期終了後においては、その「運動の行い方高め方」を活用しつつ、スポーツ実践を通して、自然環境とのつながり、人と人とのつながり、人と地域社会とのつながりを持続的に形成するこ

とを視野に入れた特定の競争形式を有するスポーツ文化の構築が重要であることを明らかにした。

（３）「学びの自己展開」に向けたプログラムの在り方

（１）と（２）の成果から、近代スポーツと人間に対する「主‐従」関係の転換が求められると同時に、既存のスポーツ文化だけに依存するのではなく、また個々人の身体的特徴が誰一人同一でないように、個々の身の丈に合致した運動文化（それは既存のスポーツを含む運動文化の修正を含む）や新たな運動文化を創造することによって、多様な身体的価値追求のための媒体の拡大へと視野を拓くことの必要性について明らかにした。

また教科体育においては、「身体的イメージサイクルの理解」をもとにしたプログラム開発、すなわち、身体における「自己観察力」の育成と「身体的価値のイメージ」を具体化するための方法を創造し、計画し、実践しうる能力を養うプログラムの開発が必要であることを明らかにするとともに、学校体育期を終えた大学生を対象とした授業実践においても、そのプログラムの成果の一面を実証することができた。

その成果とは、これまでスポーツに対して好意的でない認識をもっていた学生、或いは、スポーツが得意ではない学生ほど、「身体的イメージサイクルの理解」が深まったことが明らかになったことである。このことは、今回実証したプログラムによって、自ら「運動の行い方高め方」を活用しつつ、個々の身の丈に合致した運動文化の実践による多様な身体的価値の追究に向け、持続的なスポーツや運動の実践継続の可能性を大いに予感させるものであった。

またそこでの教師の役割は、「評価主体である児童・生徒の自己評価」に対する「第三者的評価」を行うことによって、児童・生徒の学校体育期以降における省察の持続を支援する立場にたつという役割が求められることも明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

①新保 淳、村田 真一、大村 高弘、三原 幹夫、河野 清司、高根 信吾、ＥＳＤを視野に入れた学校体育におけるプログラム開発－体育実践におけるパフォーマンス評価を事例にして－、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）、査読有、第 49 号、2018、155－170

②新保 淳、大村 高広、村田 真一、持続発展教育を視点とした新たな教科体育の展望、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）、査読有、第 48 号、2017、237－252
https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/

③村田 真一、高根 信吾、新保 淳、持続可能な発展として捉えるスポーツ生活論の課題、静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）、査読有、第 48 号、2017、297－314
https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/

④河野 清司、生涯スポーツの推進に関する一考察－競争の形式およびスポーツクラブ間の顧客をめぐる競争に着目して、体育・スポーツ哲学研究、査読有、Vol.39　No.1、2017、1－18
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jspspe/-char/ja/

⑤河野 清司、生涯スポーツのための競争形式および組織、日本体育学会第 66 回大会体育哲学専門領域シンポジウム A 報告書、体育哲学研究、査読無、第 46 号、2016、27－32

⑥河野 清司、スポーツと開発に関する基礎的研究－ESD（持続可能な開発のための教育）を視座にして、至学館大学研究紀要、査読有、第 50 号、2016、25－43
https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000002-I027634067-00

⑦河野 清司、新保 淳、三原 幹生、高根 信吾、村田 真一、スポーツ文化の未来像構築に向けて ：ESD の視点からのアプローチ、至学館大学研究紀要、査読有、第 49 号、2015、15－35

〔学会発表〕（計３件）

①村田 真一、高根 信吾、三原 幹生、新保 淳、河野 清司、持続可能なスポーツ生活に関する基礎的考察、日本体育学会第 66 回大会(国士舘大学)、2015

②河野 清司、生涯スポーツのための競争形式および組織、日本体育学会第 66 回大会体育哲学専門領域シンポジュウム A 報告、生涯スポーツ（論）と学校体育（1 年目）－生涯教育・学習としての「文化としてのスポーツ」（国士舘大学）、2015

③河野 清司、スポーツと開発に関する考察：ESD（持続可能な開発のための教育）を視座にして、日本体育学会体育哲学専門領域、平成 27 年度第 2 回定例研究会（放送大学東京文京学習センター）、2015

６．研究組織

(1)研究代表者

三原　幹生（MIHARA, Mikio）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０３０３６８１

(2)研究分担者

河野　清司（KONO, Kiyoshi）
至学館大学短期大学部・体育学科・准教授
研究者番号：００４３５２９９

高根　信吾（TAKANE, Shingo）
常葉大学・経営学部・准教授
研究者番号：７０４４０６０９

新保　淳（SHIMBO, Atsushi）
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１８７５７０

村田　真一（MURATA, Shinichi）
静岡大学・地域創造学環・講師
研究者番号：２０４３５０９３